

## 韓国木簡のフィールド調査と古代史研究

### ― 咸安・城山山城木簡の共同調査より

#### はじめに

本稿の目的は、「フィールド歴史学」について、韓国出土木簡の調査・研究における実践から論じることにある。筆者は、早稲田大学朝鮮文化研究所（所長 李成市文学学術院教授。以下、朝文研と略す。）の客員研究員として、韓国の研究機関と協力して咸安・城山山城木簡のデータベースを作成したり、木簡の釈文や表面観察を行なったりするなど共同調査に携わってきた。こうした調査事例を通じて、フィールド調査がどのように歴史研究に貢献しうるのか、その道筋を考察していきたい。

まずそのために、フィールド歴史学のなかで、木簡をはじめとする出土文字資料の調査が、どのように位置づけられる

のか確認しておきたい。

そもそもフィールド歴史学とは、どのような方法的特徴をもつか。そのひとつの回答として、早稲田大学文学学術院ホームページには、以下のように述べられている。<sup>(1)</sup>

橋 本 繁

史料は文献として編纂されたものだけを指すのではなく、（中略）出土文字資料は、後世の人の手が入っていないまさに一次資料です。アジア史コースでは、こうした出土資料を文献史料と立体的に組み合わせ、文献史料の編纂者（『史記』ならば司馬遷）のバイアスを克服した、より歴史の実相に迫る方法論を追求します。さらにまた、中国や韓国において現地の研究機関と共同でフィールド調査によって収集した静止画・動画資料等も駆使し、文字資料の限界を超えた、考古学・民俗学・神話学等の関連諸科

学を大胆に導入した歴史学を追求します。これは史料を与えられたものとして解読する従来型の歴史学の限界を克服し、フィールドでそれを発見・発掘する新しい歴史学です。

この記述から、フィールド歴史学の特色は、①一次資料である出土文字資料を文献史料と組み合わせ、歴史の実相に迫る。②現地の研究機関と共同でフィールド調査して資料を収集する。③考古学・民俗学・神話学等の関連諸科学を導入する、この三点にまとめられよう。では、これらは、実際の研究ではどのような順序でなされるのだろうか。

本簡調査から古代史研究への道すじについて、次のように三つの段階に整理される。

- a. 本簡の材質、形態、書風、字形、文字の配置、追筆、異筆の有無、削りなどの二次的整形の有無、等々の本簡自体についての直接的で即物的認識
- b. aの認識を総合的に判断して、本簡の作成者、受取人、両者に介在する組織や人物、本簡に与えられた機能についての推論的認識
- c. 本簡のもつ歴史的意義の認識、本簡から解明された古代社会像の理解

このa↓b↓cの「認識の段階を踏んで研究が、本簡そのものの研究から、古代史研究へと上昇していく」とされる。また、各段階の認識の特徴について、a段階は、感性的な認

識に重点があり一義的な回答が得やすいのに対して、b段階は、推論部分が大きい役割を占めているので、仮説が複数成立する場合が多い。c段階は、本簡の即物的認識からは遠ざかり、歴史研究の理論問題も関係してくる、と指摘されている<sup>②</sup>。

このような整理に、フィールド歴史学の三つの特色を当てはめてみると、①出土文字資料と文献史料を組み合わせる歴史の実相を描くのは主にc段階に、②現地の研究機関と共同で出土文字資料を収集するのはa段階に、③関連諸科学の導入はc段階にも関わるが主にb段階に関わると考えられる。

したがって、フィールド歴史学の特徴を研究の段階順に整理すると、

- 1. 現地の研究機関と共同してフィールド調査で資料を収集する（a段階）
  - 2. それらを考古学・民俗学など関連諸科学を導入することとで解釈する（b段階）
  - 3. 文献史料と組み合わせることで歴史の実相に迫る（c段階）
- となろう。

本稿で主に扱うのは、このうち1.の共同調査について、つまり研究のもつとも初期段階についてである。そして、この段階が、フィールド歴史学のもつとも大きな特色であると筆者は考えている。ただ、一次資料である出土文字資料は、

確かに「編纂者のバイアス」はないが、調査者の主観、関心によって情報量は大きく異なってしまう。調査者が働きかけない限り、歴史を物語ってはくれないのである。本稿では、どうすれば出土文字資料から正確で豊富な情報を引き出すことができるのかを論じていきたい。

以下の本論では、これまでの共同調査の時系列に沿って述べていく。それは研究段階の順序とも重なっているためである。第一章では、共同調査の第一歩として行なった、木簡の基礎的な情報を共有するための作業について紹介する。調査を開始した当初、韓国木簡は、ほとんど公開されておらず、その結果、研究もなされていなかった。そのため、まずは鮮明な写真を公表し、誰でも容易に木簡の検討を行える環境を整えた。第二章では、新たな釈文作成の方法や成果、共同調査の過程で明らかになった考古学的な事実が、歴史研究にどのような意味を持つのか論じるとともに、調査方法の課題についても述べる。

## 一 基礎資料の共有化

### (一) 共同研究協定の締結

朝文研が、どのような経緯で共同研究を行なうことになったのか、また、調査対象である城山山城木簡の史的な価値について、簡単に説明を加えていきたい。

出土文字資料研究に本格的に関わるようになったのは、二〇〇二年から二〇〇六年度までの五年間、早稲田大学二一世紀COEプログラム「アジア地域文化エンハンシング研究センター」に参加したことによる。同研究センターにおける全体の課題は、中国文明とアジアにおける諸地域文化の相互関係の解明であった。<sup>③</sup> そのなかで朝文研は、中国文明が中国東北地方・朝鮮半島に及ぼした社会的・文化的影響を、漢字文化を通して解明してきた。<sup>④</sup> こうした課題に取組むための具体的な史料として、出土点数の増加しつつあった韓国木簡に着目したのである。

その中でも、咸安・城山山城遺跡から出土した木簡を主要な研究対象とした。韓国木簡の研究において画期的な位置を占めるためである。

第一に、城山山城木簡は、二〇〇二年時点で一〇〇点余もまとまって出土した唯一の木簡群であった。これは、当時、約二五〇点出土していた韓国木簡の約半分にも<sup>⑤</sup>のぼる。

第二に、一九九〇年代の前半の発掘により出土した二七点の木簡について、一九九八年には早くも正報告書が刊行されて赤外線写真も掲載された。<sup>⑥</sup> このように早く木簡の全貌が明らかとなったのは本木簡がはじめてだった。

第三に、木簡の性格について、新羅北部から裨を貢進していたときの付札（荷札）であることが明らかであった。

第四に、木簡の年代が六世紀半ばであることから、中国木

簡と日本木簡の間の空白を埋めうる史料である。日本列島の木簡が七世紀前半までしか遡らず、中国大陆の木簡が晋代以降にはみられなくなるため、ちょうどその中間に位置するのである。

こうした重要性から、一九九九年に韓国国立金海博物館において、城山山城木簡をテーマとして国際シンポジウムが開催された。これは韓国木簡を主題とするはじめてのシンポジウムであり、中国や日本からも研究者が参加した。<sup>7)</sup>

城山山城木簡はこのように赤外線写真が公開され、年代や性格がはっきりしており、しかもまとまった数で出土した唯一の例であった。<sup>8)</sup>さらに、継続的に発掘をおこなっているため、新たな出土も期待できた。これ以外の木簡の場合、例えば慶州の雁鴨池から一九七五年に五〇点以上の木簡がまとまって出土してはいたが、報告書などには不鮮明な白黒写真しか公表されていなかった。また二聖山城木簡についても、報告書や論文も発表されてはいたが、出土点数が少ないため具体的な用途の推定は困難であった。<sup>9)</sup>

これらの理由から、城山山城木簡を主たる調査対象とするために、同遺跡を継続して発掘している韓国国立昌原文化財研究所（以下、昌文研と略す）に共同研究を申し入れたのである。<sup>10)</sup>

交渉の具体的経過については詳述しないが、信頼関係の構築に努めたことを強調したい。二〇〇二年一月にはじめて

共同研究を依頼してから、二〇〇四年三月に共同研究協定を締結するまで一年以上もかかった。それは、研究目的を説明し理解を求めるために、何度も昌文研を訪れる必要があったからである。それだけでなく、協定を現実的効力を持つものとして維持するために締結後も一年に数回訪問した。それは、所長が頻繁に交替したためでもあり、最初に訪問した時から二〇〇八年一〇月現在までの六年間に、六名が所長となっている。平均して一年で所長が交替しており、その度に、研究の目的について再度説明をおこない、共同調査への了解を求めた。幸いにも、直接業務を統括している学芸研究室長は、この間に一度しか交替しなかったこともあり、調査は一貫した方針で進めることができた。

先方の責任者も共同調査の意義を認め、双方で調査を推進しない限り、協定があっても実現は困難であった。研究するための資料を獲得できさえすればよいという姿勢ではなく、調査・研究を共同で行なうことの意義を共有し、長期的な信頼関係を築くことが不可欠である。

## （二）『韓国の古代木簡』の刊行

上述のように、共同研究を開始した時点では、ほとんどの木簡が公開されていなかった。木簡を研究すること自体、非常に困難な状態にあったのである。そのため、基礎的な資料環境を整えることが共同研究の最初の課題であり、総合的な

木簡資料集の刊行をひとつの目標として想定していた。

ところが、昌文研側でも韓国木簡を網羅した図録の作成を計画していることが、鄭桂玉室長（当時）らと共同研究について話合う中で明らかとなった。そこで、朝文研がこの企画に協力して日本でも同時に刊行することとなり、日本語への翻訳と日本における販売を担当した。こうして最初の共同作業として『韓国の古代木簡』（以下、『古代木簡』と略す）を刊行した<sup>①</sup>。同図録には、城山山城木簡はもちろん、その時点までに出土した一三遺跡、約三〇〇点の木簡はほすべてについて原寸大の赤外線写真とカラー写真、一部には実測図も掲載されている。二〇〇二年に出土した約七〇点の城山山城木簡をはじめ本図録によって初めて公開された木簡も少なくなく、また、それまで白黒写真しかなく文字が読めなかった木簡についても、鮮明な赤外線写真による新たな釈文が可能となった。この『古代木簡』の出版をもって韓国木簡研究が本格的に開始されたといっても過言ではなく、研究史の画期となった。

### （三）木簡画像データベース

『古代木簡』によって、資料環境は格段に整えられた。しかし、残された問題がないわけではなかった。木簡が完全に網羅されておらず、すでに正式な報告書のでている宮南池木簡の一部は掲載されていない。また、赤外線写真の拡大写真

が横に添えられているが、不用意に加工が加えられているため、墨痕でない部分を文字の一部と誤認する可能性がある。さらに、写真そのものについても、赤外線写真とカラー写真とで、撮影時の角度がずれてしまっているものが少なくない。図一の矢印で示した木簡の欠損部分が大きくずれてしまっているのは、このためである。これでは、赤外線写真とカラー写真の対照が困難で、二つを並列した意味が半減してしまう。

こうした問題を解決するために、共同調査の一環として、より良質な城山山城木簡の写真を撮影し、データベースとして公開することとした。コンテンツ株式会社との協力により、高精度デジタルカメラによるカラー写真と赤外線写真の撮影を実施した。二〇〇六年八月には、二〇〇二年に出土した約七〇点を昌文研において、

図一 撮影角度のずれ



同年二月には一九九〇年代に出土した二七点を国立金海博物館において、それぞれ撮影した。こうして撮

図二 木簡データベース 影した写真データには、コンピュータによる画像処理を加えた。木簡の表面は、



保存処理をおこなったあと漂白処理などはしていないため、かなり濃い茶色である。そのままの状態では、表面の状態などが非常に分かりづらい。そこで、自然な木の色に近づけるように明度を上げるなどの調整を加えている。また、赤外線

写真についても、濃淡やコントラストの調整をおこなって、墨痕が分かりやすいようにしている。こうした加工もコンテンツ株式会社が行なったが、担当者は木簡研究者ではないため、どのように加工すれば研究に役立つか判断が難しい。そこで、三五号木簡をサンプルとし、筆者と担当者でどのような濃度・コントラストで表現すべきかについて検討した。特に、最後から二文字目の「支」の墨が薄くなっているため、これになるべく明確にするようにした(図四・右から二点目)。こうしてできたサンプルの明度・コントラストなどにそれ以外の木簡を合わせていった。

そして、調整を加えたカラー写真と赤外線写真の二種類を

並列し、自由に拡大縮小しながら観察できるようにした。こうした方式を採用したのは、木簡表面の情報をえられるようにするためである。赤外線写真は黒と白でしか表現されないため、黒くみえている部分が墨であるのか、あるいは表面の凹凸による影や付着した異物であるのか、判断が困難である。木簡は文字を崩して書くことも多く、しかも文字が必ずしもはっきり残っているわけではないため、そうしたわずかな一本の線の有無で釈文が左右される。カラー写真と並列し木簡表面の情報を伝えることで、墨か否かの判断などがある程度可能となる。このデータベースによって、木簡を現地で実際に見ずには知り得なかった表面の観察が、インターネットを通じて可能になったのである。<sup>12)</sup>

## 二 共同調査の成果

### (一) 釈文の作成

前章では、研究の前提となる資料の公開についてのべてきた。本章では、共同調査で得られた成果について述べていきたい。

最初に、城山山城木簡の新たな釈文の作成について述べていく。

韓国木簡研究では、広く共有された釈文の存在しないことが問題となっている。各研究者がそれぞれに釈文をおこない、

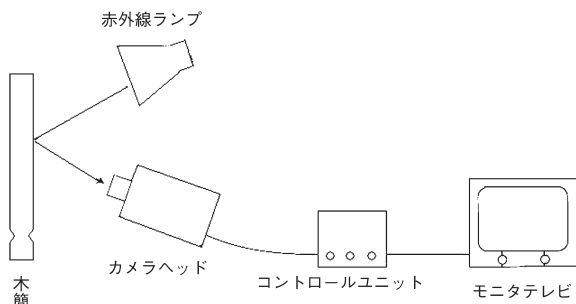


その積文に基づいて研究がなされるため、議論が平行線をたどることもしばしばある。そのため『古代木簡』では、多くの積文を併記する方法がとられた<sup>13</sup>。より確かで広く共有できる積文の作成が必要となっている。

こうした課題に取り組むために、朝文研の研究員である平

図三 木簡調査の模式図

〔古代日本文字のある風景〕  
六四頁の図を一部改変



川南（国立歴史民俗博物館・日本古代史）、三上喜孝（山形大学・日本古代史）、安部聡一郎（金沢大学・中国古代史）の三氏に調査に加わっていた。古代日本の木簡や、中国・呉の木牘や竹簡と比較しつつ調査を実施し、積文だけでなく木簡の具体的な用途についても討論をおこなってきた。また、昌文研での調査の際には、朴鍾益室長も一部参加し、保存科学室の梁碩真氏が木簡の管理を担当した。

さて、積文の作成は、「はじめに」で述べた木簡研究の三段階ではa段階に相当

しよう。そうすると「即物的な認識」、「感性的な認識」であり、「一義的な回答」が得やすい、ということになる。しかしながら、客観的なデータを取り得るものではなく、実際には、b・c段階とも密接に関わる作業である。それは、以下のような積文を作成する作業そのものから明らかである。

よくある誤解として、木簡の赤外線写真さえ撮影すれば、墨痕が鮮やかに見えて容易に文字が判読できる、というものがある。確かに、肉眼で全くみえなかった墨痕でも、赤外線カメラによって鮮やかに浮かびあがることは事実である。しかし、赤外線カメラは決して万能ではなく、文字そのものが自然と見えてくるわけではない。第一章で述べた通りデータベース用の木簡写真を様々に加工したのと同様に、赤外線による調査も図三の模式図に示した様々な機械の調整が必要である<sup>14</sup>。例えば、赤外線ランプを当てる角度によっても見え方は大きく異なる。赤外線カメラでみえた黒い部分が墨痕であるとは限らず、実は木目による凹みの影で、木簡を九〇度回転したら消えてしまうということも珍しくない。モニター画像と実物とを絶えず見比べながら慎重に判断しなくてはならないのである。

また、墨痕は多くの場合、完全に残っているわけではなく、残画によって文字を判断することとなる。そうになると、赤外線映し出した映像の濃淡やコントラストをコントロールユニットで調整しながら、どのような筆の動きで文字が書かれ

たのかを推測することとなる。このように釈文は、多分に「判断」を含んだ作業である。

さらに釈文は、ある程度文字の可能性を限定しながら進めている。なぜなら数万字もある漢字を、ひと文字ずつ可能性を探っていつて確定するのは不可能だからである。もちろん、実際に木簡に書かれる文字はせいぜい数百〜数千であろうが、それでも墨痕だけでは文字を特定できない場合も多い。そのような場合には、この箇所にはこうした文字が来るはずである、という予測を立てて釈文することとなる。つまり墨痕からある文字に確定できるというよりは、極端にいえば「この部分にはこのような意味を持つ文字が来るはずであり、この残画はこの文字であると推定しても矛盾はない。したがってこの文字である」という推測である。

ただ、推測による釈文といっても、根拠がない釈文というわけではない。木簡の記載様式を十分に踏まえた上で、この文字はこのように読めると論理的に釈文しているのである。単純な例では、もし木簡に「年」や「月」という文字があれば、その前には干支や数字がくることは容易に予想できる。

城山山城木簡の具体的な例をみていく。仇利伐という地域から運ばれてきたと考えられる木簡の一部に、共通した記載様式をもつものが見出された。もつとも典型的にみられるのが三五号木簡で、「内里知奴人居助支負」とある。「内里知+奴人+居助支+負」という構造で、内里知、居助支がいずれ

も人名である。そこで、人名の間に挿入されている「奴人」に着目して他の木簡をみると、五号にも「奴人」、三六号・三七号・三八号には「奴」が見出される。これら五点の木簡を相互に比較した結果、「人名（知・智）+奴人+人名（支）+負」という共通した記載様式によるらしいことがわかった。<sup>(15)</sup>

これらの木簡について『古代木簡』に掲載された釈文では、それぞれ

五号

仇利伐 □徳知一伐奴人□

三六号

乃□□ 只即智奴□□

於□支□

三七号

内只次奴 須礼支□□

三八号

比夕須奴

尔先□支 □□



図四 同じ記載様式をもつ城山山城木簡



と釈文されている。しかし、「人名＋奴人＋人名＋負」という記載様式で書かれているという仮説に立つことによって、それまでは十分に判読できなかった文字が推定できるようになる。

まず、三八号の三文字目「須」と読まれてきた文字は、字形をみると確かに右側が「頁」のようにみえる。しかし、記載様式から人名の末尾にくる「知・智」と読みうる可能性を念頭に改めて文字をみると、「𠂔」にみえた部分は「矢」を、「頁」は「口」と「日」を崩して書いたものであることがわかる。「矢」五画目の右はらいがかなり長く書かれていたた

め、「頁」の最終画のように見えていたのである。このように頻繁に使用される文字の場合、崩して書かれることが多い。例えば、日本古代の木簡の例では、人名末尾につく「麻呂」<sup>16)</sup>「万呂」が簡略化される。崩して書いても読み手にとっては判読が容易なためである。

また、各木簡の最後の文字も読むことができず、しかも二文字あるものと考えられていた。しかし、同じ記載様式をもつ三五号の最後の文字や、ほかの仇利伐木簡一七、三三、五七号とも比較した結果、「負」であることを明らかにした。そのほか五号木簡について、最後の文字を「塩」と釈文する見解があつたが、記載様式から奴人の次には人名がくるため、人名の冒頭である可能性が高くなった。

こうした理解に基づいて、釈文を次のように訂正することができた。<sup>18)</sup>

五号

「仇利伐 □徳知一伐奴人 □×

三五号

「内里知 奴人 居助支 負 <」

三六号

「仇利伐 只即智奴  
於非支負 <」

三七号

× 内只次奴 須礼支負 <

三八号

× 比夕智奴  
尔先能支負

ところで、このような木簡の記載様式にもとづいた釈文の背景には、木簡の性格がどのようなものであるかという理解、すなわちb段階の推論的な研究が存在する。つまり、木簡の用途や性格についての仮説があつてこそ、a段階の釈文作成において様々な読解の可能性を試行錯誤しうるのである。

「はじめに」で、木簡の調査からa↓b↓cの順に認識の段階を踏むとしたが、b段階やc段階の問題意識をもつてこそ、a段階の調査を充実したものとしうるのである。

## (二) 出土状況

前節では、釈文作成という基礎調査においても記載様式など推論的な理解が必要であることを述べた。本節では、木簡を解釈するためには、遺跡の性格を理解することが必要不可欠であり、それには考古学の成果を取り入れなければならないことをみていく。これは、フィールド歴史学の二番目の特徴、関連諸科学の導入に相当する。

そもそも、ある遺跡から木簡が出土するということは、その場所で木簡が不要になり廃棄されたためである。そして、

木簡がなぜその場所で廃棄されたのかを理解するためには、作成されてから廃棄されるまでのライフサイクルを明らかにすることが重要となる。そうした情報は、中国木簡のなかには、木簡そのものに文書の伝達経路が書かれているものもあるが<sup>19)</sup>、これまで出土した韓国木簡にはそういった事例はない。そのため、木簡の内容以外の情報、主として考古学の成果に頼らざるを得ないのである。

城山山城木簡のような荷札のライフサイクルをみると、貢進側において内容が記され（作成）、それから受納側、消費側へと移動し、一定期間保管された後、不要になって廃棄されるという経路をたどることになる。作成↓移動↓保管↓廃棄という木簡の動きを復元することが、歴史的な問題を解くためのカギとなりうる。<sup>21)</sup> 例えば、木簡の作成についてみると、城山山城木簡にみられる地名は洛東江の上流域がほとんどであり、これらの地域で木簡が作成されたことは分かるが、州、郡、城・村など地方支配のどのレベルで作成されたのかは明らかにっていない。もし、こうした事実を明らかにすることができれば、貢納が当時どのように負担されていたか、文書行政がどのようになされていたのかを解明するためのカギになるだろう。<sup>22)</sup>

以下では、共同調査のおこなわれている期間におこなわれた発掘により、木簡の廃棄状況が明らかとなったことの意義を検討する。

木簡が出土している東門付近の遺構について、これまでの調査結果では低湿地とされてきた。そのため、多くの研究者が、山城が使用されている時に廃棄された木簡であると考えた。ところが、二〇〇六年の発掘を担当した李晟準により、はじめて堆積の具体的様相が明らかとなった。低湿地と理解されてきた木簡集中出土地点は、自然に堆積したのではなく、人為的に造成されたものであることが判明したのである。

では、なぜ木簡をはじめ様々な有機物がこの地点に埋立てられたのか。

同地点は山城のある鳥南山のもっとも深い溪谷部に位置する。そのため、ダムのように溪谷を塞いでいる城壁は、もし排水能力が低いと崩壊するほかない。このような地形的弱点を克服するために多量の有機物を積んで、その上部に粘土を固めて旧地表面を形成し、その上で断面L字形に自然岩盤層まで掘ったあと、城壁を築いた。こうすることで、相当量の水が地表下に染み込んで植物有機物層に吸収され、地下から自然に排水されたと推定される、という。<sup>(23)</sup>

木簡が城壁より先行するというこの新たな事実、木簡の理解に根本的な変化をもたらした。

先述のように城山山城木簡は、山城に駐屯している軍隊を養うために運ばれてきた軍糧につけられていたと理解されてきた。ところが、城壁に先行するとなると、軍糧として使用

されたとは考えにくい。一体誰が、どのような目的で消費したのか、再考を迫られることとなった。

咸安には、もともと安羅加耶という国が存在していた。ところが、木簡は記載内容から新羅のものであることが明らかである。したがって、安羅加耶を滅ぼした後に、新羅が使用したものである。山城を築く以前になんらかの施設を一度設置し、そこで木簡を使用・廃棄した後、改めて山城を築いた、という可能性も考えられる。しかし、安羅加耶の滅亡と木簡の使用年代にはほとんど差がないと考えられるため、不自然である。そこで想定される別の可能性は、築城の際に消費されたというものである。城壁を築くために動員された人々の食料として稗や麦が運ばれてきたと考えるのである。

もしそうだとすると、城山山城木簡に年紀のないことが容易に説明しうる。年月が書かれていないのは、様々な地域から一定時期に集中して運ばれたため、との指摘がある。<sup>(24)</sup>長期保存が前提とされておらず、築城期間に消費することが前提であったためと想定しうるのである。<sup>(25)</sup>

そして、城山山城木簡が築城に動員された人々の食料であったとすると、六世紀新羅の他の出土文字資料との比較も視野に入ってくる。新羅の石碑には力役動員に関連したものが多く、五五一年の明活山城碑、五九一年の南山新城碑は、地方から徴発されてきた人々が王京に山城を築いた際の記録であり、新羅の地方支配に関する根本史料となっている。<sup>(26)</sup>城山山

城木簡が、築城に関わる史料であるとなると、石碑と木簡とを総合して研究することが初めて可能になるのである。

城山山城木簡の付けられていた物資が、築城時に消費されたものかどうかは仮説の段階にあり、今後の発掘や研究を待たなければならない。ただ、これまで述べてきたように出土状況を明らかにすることが、木簡の機能や性格の理解に直結する重要な情報であることは間違いない。

### (二) 調査方法の課題

本章ではこれまで、积文作成が木簡の用途の理解と密接に関わること、そのためには考古学的な知見が根本的に重要であることを述べてきた。このような木簡の特性からして、积文を検討する場に、発掘現場の責任者が同席することが望ましい。文献史学者による木簡調査は書かれた文字に集中しがちだが、発掘担当者は遺跡の全体像のなかで木簡をとらえている。积文作成段階で立てる仮説の可能性の幅は、遺跡・遺構の性格により限定される。そうした点について発掘担当者との意見交換しながら、木簡の用途等に対する理解を共有しつつ一点一点検討するよう努めるべきである。

しかし、こうした調査を実現するには困難も伴う。积文の検討には非常に長い時間が必要なのである。一〇〇点近い城山山城木簡の积文は、二〇〇六年の第一次調査で三日間、翌年の第二次調査で二日間、計五日間にわたる調査が必要で

あった。それも、日本で予め検討会をおこなって解釈上の問題点を確かめた上でであった。もし現地において再度担当者にその問題点を説明し、通訳をおこないながら調査したとすれば、さらに長時間が必要であつたろう。共同調査の日程をそのように長くすることは容易ではない。そのため、これまでの調査では、木簡の全体像についてある程度の知見を得たところで、結果を発掘担当者に報告するという形式にならざるをえなかった。

そして、积文作成を共同でおこなえなかった結果、昌文研側との积文の統一はできなかった。四年間にわたる共同研究の成果をまとめて二〇〇七年一二月末にまず韓国で刊行された共同研究資料集『咸安城山山城出土木簡』では、昌文研の积文が図版部分の各木簡の下端に、朝文研側の积文が論考部分にまとめて掲載されている。したがって、研究を行おうとする場合、双方の积文を参照し、どの积文に従うか判断しなくてはならないことになる。

积文の作成過程からその公開にいたるまで、望ましい調査方法は、今後も模索を続けて行かなくてはならない課題として残されている。

### おわりに

本稿では、フィールド歴史学のもっとも初期段階に位置づ

けられる現地研究機関との共同による資料調査を主題とした。第一章では、昌文研との共同による『古代木簡』の刊行、写真データベースの公開による基礎資料の共有化作業について述べた。第二章では信頼できる釈文の作成と、発掘調査の成果がもつ重要性について論じた。釈文や発掘調査に重点を置いたのは、これらが完全に「客観的」なデータではないとはいえ、ある程度共有しうる成果だからでもある。つまり、本稿で扱った朝文研のこれまでの共同調査は、資料を共有するための努力であるといつてよい。

では、なぜ資料を共有しなければならないのか。それは、韓国木簡はわずか数百点しか出土していないため、韓国史だけでなく広い視野からの研究が不可欠であるからであり、それと同時に、韓国木簡を通じて国際的な研究を展開しようと考ええるからである。

これまでの韓国木簡研究においても、日本列島の木簡との比較は盛んに行なわれてきた。<sup>27)</sup>それは、中国木簡とは異なり紙木併用時代の木簡であるため、日韓で共通する記載様式のものが多いためである。こうした研究方法は、韓国木簡の用途を推定するために非常に有効であったが、それだけでなく、朝鮮半島から日本列島への文字文化の伝播を、具体的な史料によって裏付けることにもなったのである。木簡の使用法については文書行政そのものが、新羅や百濟から古代日本に伝わったと考えられるようになってきている。<sup>(28)</sup>中国の木簡との比較

は、残念ながらこれまでのところ極めて部分的にしかなされておらず、高句麗、新羅、百濟などの文字文化がどのように成立していったのかは、今後の課題である。ただ、紀元前一世紀の楽浪木簡が発見されたことにより、同時代の他の漢簡との比較研究など様々な可能性も生まれている。

このように韓国木簡は、いままで一国史の視点から研究されてきた木簡を、古代東アジアにおける文字文化の伝播など新たな枠組みでの研究素材とする契機となりうる。<sup>(30)</sup>今後、韓国木簡を視野に入れた研究が、中国木簡、日本木簡に関しても活発になされると期待される。そのためには良質な基礎資料が国際的に共有されなくてはならず、それには信頼しうる調査が前提として不可欠である。

木簡の調査から歴史研究へは、a↓b↓cという段階を追ってなされるとはじめに述べたが、c段階の問題意識をもつていてこそ、b段階の木簡の理解が深まり、さらにはa段階のフィールド調査が重要な意味をもつてくる。問題意識を現地の研究機関と共有した上で資料の共同調査をなした時に、フィールド歴史学による新たな研究の可能性が開かれると信じる。

注

(1) <http://www.waseda.jp/bun/ga/index8.html#15> 引用文は一部省略し  
てゐる。

- (2) 鬼頭清明『考古学ライブラリー五七 木簡』（ニューサイエンス社、一九九〇年）二七―二八頁。
- (3) 同研究センターの成果については、『アジア地域文化学叢書』全一〇巻（雄山閣、二〇〇七年）など参照。
- (4) 研究成果は、前掲叢書第四巻『韓国出土木簡の世界』にまとめられている。
- (5) 二〇〇八年九月現在、韓国木簡は文字があるものに限ると約三六〇点、城山山城木簡はそのうち約一九〇点を占める。一〇〇点以上の木簡が出土した遺跡は、韓国ではまだ他にない。
- (6) 国立昌原文化財研究所編『学術調査報告第五輯 咸安城山山城発掘調査報告書』（国立昌原文化財研究所、一九九八年）。
- (7) シンポジウムでの報告はその後『韓国古代史研究』一九、二〇〇〇年に掲載されている。
- (8) 城山山城木簡については、李成市「城山山城新羅木簡から何がわかるか」『月刊しにか』一一―一九、二〇〇〇年）同「朝鮮の文書行政―六世紀の新羅」（平川南ほか編『文字と古代日本2 文字による交流』吉川弘文館、二〇〇五年）を参照。
- (9) 一九九〇年代までの韓国木簡の出土状況、研究状況については、李成市「韓国出土の木簡について」『木簡研究』一九、一九九七年 参照。
- (10) なお、国立昌原文化財研究所は二〇〇七年一月より国立加耶文化財研究所と改称しているが、本稿では、昌文研で統一した。
- (11) 国立昌原文化財研究所編『韓国の古代木簡』（国立昌原文化財研究所、二〇〇四年）。なお、その後、増補し縮刷した改訂版が二〇〇六年に刊行されている。
- (12) データベースは、<http://www.haman-sungsan.go.kr/database/josan-sanjo/>で公開されている。
- (13) 一九九〇年代に出土した二四点の木簡については、一人の釈

文が併記されている。

- (14) 国立歴史民俗博物館編『古代日本 文字のある風景』（朝日新聞社、二〇〇二年）六四―六五頁。
- (15) 「奴人」、「負」の意味については、様々に論じられているがはっきりしたことは分かっていない（朴鍾益「咸安城山山城の発掘調査と出土木簡の性格」前掲『韓国出土木簡の世界』所収、一九九二―四頁）。なお、二〇〇六、二〇〇七年の発掘で新たに出土した城山山城木簡にも同様の記載様式をもつ木簡がみつかった（国立昌原文化財研究所『咸安城山山城 一次発掘調査現場説明会資料』二〇〇六年、国立加耶文化財研究所『咸安城山山城 一次発掘調査現場説明会資料』二〇〇七年二月一―三日）。
- (16) 奈良文化財研究所編『日本古代木簡字典』（八木書店、二〇〇八年）一六八頁の「麻呂」「万呂」の項。
- (17) 李京燮「城山山城出土荷札木簡의 製作地와 機能」（『韓国古代史研究』三七、二〇〇五年）一三〇―一三五頁は、塩の貢進を積極的に解釈し、仇利伐を海岸地帯に比定する根拠としている。
- (18) 釈文に加えた符号は日本の木簡学会の方法によるもので（『凡例』『木簡研究』一九、二〇〇七年、vii―x頁、「」は木簡の端が原形をとどめていること、くは切込み、×は前後に文字の続くことが内容上推定されることを示す。あくまで便宜上したがったものであり、こうした符号や形式分類なども韓国木簡に則した方法で今後確立されるべきである。
- (19) たとえば居延簡にみえる詔書の例など（大庭脩「居延出土の詔書冊」『秦漢法制史の研究』創文社、一九八二年）。
- (20) 今泉隆雄「門勝制・門籍制と木簡―木簡のライフサイクル―」（『古代木簡の研究』吉川弘文館、一九九八年）一四〇―一四一頁。
- (21) 木簡の表面観察から、細い松の枝を加工して作成したことが保管状況の一端を明らかにした（橋本繁「咸安城山山城木簡의 製作



技法」国立加耶文化財研究所・早稲田大学朝鮮文化研究所編著『咸安城山山城出土木簡』二〇〇七年。

(22) この問題については、別稿で詳しく検討する予定である。

(23) 李晟準「咸安城山山城木簡集中出土地発掘調査成果」発掘調査方法 및 遺跡의 性格을 中心으로」(前掲『咸安城山山城出土木簡』所収) 一三〇～一三二頁。

(24) 李鎔賢「咸安城山山城出土木簡의 性格論——次報告分을 中心으로」(『考古学誌』一四、二〇〇五年) 一二九～一三〇頁。

(25) 日本の荷札木簡の多くは、貢進した年月が明記されており、「中央政府の倉庫に納ったあとは、いつの年度のどこ産の品物であるかを示す木札としても機能した」(狩野久『日本の美術一六〇 木簡』至文堂、一九七九年、四八頁) という。

(26) 代表的な研究成果としては、朱甫敬『新羅地方統治体制의 整備過程과 村落』(シンソウォン、一九九八年)、同『金石文과 新羅史』(知識産業社、二〇〇二年) など。

(27) 李成市「韓国出土の木簡について」(前掲誌)、平川南「韓国・城山山城跡木簡」(『古代地方木簡の研究』吉川弘文館、二〇〇三年)。

(28) 館野和己「日本古代の木簡」(前掲『韓国の古代木簡』、李成市「古代朝鮮の文字文化 見えてきた文字の架け橋」(『古代日本 文字の来た道——古代中国・朝鮮から列島へ』大修館書店、二〇〇五年)、三上喜孝「日韓木簡学の現状とその整理状況」(『唐代史研究』九、二〇〇六年)、三上喜孝「習書木簡からみた文字文化受容の問題」(『歴史評論』六八〇、二〇〇六年)。

(29) 尹龍九「새로 發見된 樂浪郡初元四年県別戸口簿」(『韓国古代史研究』四六、二〇〇七年)、金秉駿「樂浪郡初期의 編戸過程과 「胡漢稍別」」(『木簡과 文字』創刊号、二〇〇八年)。

(30) 李成市「東アジア文化圏の形成」(山川出版社、二〇〇〇年)。

李成市「漢字受容と文字文化からみた樂浪地域文化」(早稲田大学アジア地域文化エンハンシング研究センター編『アジア地域文化の構築』二〇〇六年)。

〔付記〕 本稿は、科学研究費補助金・基盤研究(B)「東アジアにおける韓国出土木簡の地域性格」と特別研究員奨励費「韓国出土木簡よりみた新羅の地方社会に関する研究」による研究成果の一部である。また、本稿の内容は、調査をこゝろ緒らせていただいた方々から調査過程においてご教示いただいたことに基づいている。記して謝意を表したい。

(日本学術振興会特別研究員(PD・東京大学))